

『三品經』の懺悔について

藤 近 恵 市

本論稿は、懺悔・随喜・勧請について説いた『三品經』が、初期大乘仏教の中でどのように位置づけられるのか、特に懺悔の側面から考察をするものである。『三品經』の懺悔について述べる前に、原始仏教や部派仏教における懺悔の特徴を見てみたい。

懺悔は、月二回の布薩や夏安居最終日の自恣に行われていた。その具体的な記述は、『paii律』・『摩訶僧祇律』・『五分律』・『四分律』等の諸律で規定される波羅堤木叉に示されている。波羅堤木叉とは、僧伽に入った比丘や比丘尼が守るべき規則を集めたものであり、比丘の場合は二百五十戒の条文で構成され、それが八種類に分類されている⁽¹⁾。

(1) 波羅夷法 *parajika dhamma* は、殺し・盗み・姪・大妄語の重罪であり、犯せば僧伽から追放される。原則として懺悔は認められていない。

(2) 僧殘法 *saṅghadisesa dhammā* は、性関係の罪・破僧の罪・他の僧を波羅夷罪として誹謗する罪等で、現前僧

伽の面前で懺悔し、七日間贖罪した者を許すものである。

(3) 不定法 *aniyata dhammā* は、比丘が女性と共に居た時の罪であり、罪の内容が明確でない場合には、証人の言葉により罪が決定する。懺悔によって無罪になるには、僧伽の調査を受けなければならない。

(4) 捨墮法 *nissaggiya pacittiya dhammā* は、比丘が所有の禁止されている物を持っていた時の罪であり、所有物を捨てて、清浄なる比丘の前に懺悔するものである。捨てた物は、懺悔の後に返還される。

(5) 波逸提法 *pacittiya dhammā* は、妄語・惡口等の軽い罪を九十条集めた物である。清浄なる比丘の前で、罪を懺悔して、二度と犯さないことを誓って放免される。

(6) 波羅堤舍尼法 *pāṭidesaniya dhammā* は、食物に關する罪である。受けることのできない食へ物を受けて、食べた後に気がついた場合に、比丘の前で懺悔するものである。

(7) 衆学法 *sekiyā dhammā* は、比丘の日常の行儀作法を規定している。特に罰則はなく、心の中で懺悔して、再び犯さないことを誓えば許される。

(8) 滅諍法 *adhikaraṇasamathā dhammā* は、僧伽内の争いを解決する規則である。罰則規定はなく、僧伽組織の維持を目的としている。

このように、『律藏』の波羅提木叉では、僧伽内における現実の修行生活の中で戒律を破った場合に、現前僧伽や清浄なる比丘の前で懺悔することが述べられている。

次に、『三品経』の懺悔の特徴を検討してみたい。平川氏によれば、『法鏡経』に引用された『三品経』は最古の大乗經典の一つであると考えられており、その成立は一世紀以前或いは紀元前にまで遡ると見ている。⁽²⁾ その内容は次のようなものである。

居家修道者。仮使為離師者之教誨。時世無仏。無見經者。不与聖衆相遭遇。是以当稽首十方諸仏。亦彼前世求道所行志願之弘。願者其一切成就仏法之徳。以思念之代其喜。於是昼三亦夜三。以誦三品經事。一切前世所施行惡。以自首誨。改往修來。為求哀於一切仏。以法故愍傷之。亦以無央數無極之法愍傷之。⁽³⁾

このようにインドでは、紀元前後の頃に、在家の修道者が十方諸仏に対して、昼に三回、夜に三回、『三品経』を誦誦して、前世に犯したあらゆる悪行を自ら懺悔していたことが

わかる。静谷氏は、この『三品経』に最も内容が近いものと見て、原始大乘に属し、礼仏懺悔を説く『舍利弗悔過経』をあげている。⁽⁴⁾

第一弟子舍利弗。起前長跪叉手問仏言。若善男子善女人意欲求仏道。若前世為惡。当何用悔之乎。仏言。善哉善哉。舍利弗。憂念諸天人民好及如是。仏言。若善男子善女人欲求阿羅漢道者。欲求辟支仏道者。欲求仏道者。欲知去來之事者。常以平旦日中日入人定夜半鷄鳴時。澡漱整衣服。叉手礼拜十方。自在所向悔過言。某某宿命從無數劫以來所犯過惡。至今世所犯姪失所犯瞋怒所犯愚癡。不知仏時。不知法時。不知比丘僧時……某某等諸所作過惡。願從十方諸仏求悔過。令某某等今世不犯此過殃。令某某等後世亦不彼此過殃。⁽⁵⁾

このように、善男子善女人が、阿羅漢道、辟支仏道、仏道、去來之事を求めようするならば、平旦日中日入人定夜半鷄鳴時、すなわち昼夜三回ずつ、十方諸仏に向かって、無數劫以來自ら犯してきた惡を悔過すること、すなわち懺悔することが言われている。静谷氏は、『舍利弗悔過経』について次のように述べている。

どのような人々のために作られたものであるかというと、それは冒頭の舍利弗の質問から知られるように、「仏道を求める者で過去に惡を作した者」である。この「仏道を求める」とは作仏を求めることを意味するので、「仏道を求める」とは「菩薩」をさし

『三品經』の懺悔について（藤 近）

ている。……『舍利弗悔過經』が菩薩のための悔過經であり、その点で大乘經典に属することは明白である。しかし阿羅漢者・辟支仏道を求める者も、本經では排除されていない。……ただ本經は求仏道者を対象にしているから、阿羅漢道・辟支仏道を求める者も隨喜・勧請などを行すべきであるとは説いていない。言いかえると、部派佛教の立場は尊敬を払いながら、菩薩の行としての三品經を説いているのである。⁽⁶⁾

静谷氏も指摘しているように、『舍利弗悔過經』では、阿羅漢道・辟支仏道を求める者も懺悔することが説かれている。しかしながら、中心的内容は菩薩が真に仏道を歩むためのものであり、無数劫以来、自ら犯してきた悪を懺悔する行為が、菩薩道の出発点と考えている。以上のような静谷氏の見解により、大乘仏教成立当初から、既に菩薩の行法として、懺悔が重要視されていたことが理解できる。

このような懺悔について、『舍利弗悔過經』の異訳である『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』では次のように説いている。

是時長老舍利弗承仏神力。即從坐起。偏袒右肩右膝著地。合掌礼仏白仏言。世尊。云何善男子善女人懺悔滅罪。速得三藐三菩提。仏告舍利弗言。人欲学三藐三菩提。或声聞乘人。或縁覚乘人。或大乘人。或余衆生。応誦十方十世界十仏名号。……一日一夜六時行道礼拜。偏袒右肩右膝著地合掌向仏而説此言。……我從無始生

死以来所造惡業。為一切衆生障礙。或起貪或起瞋或起癡。不識仏法僧。……我今日在諸仏前。発露懺悔不敢覆藏……如過去未來現在三世諸菩薩摩訶薩為修行菩提。已懺悔当懺悔現懺悔。我亦如是懺悔誓不敢作。……⁽⁷⁾

『菩薩藏經』

爾時長老舍利弗在彼会坐。承仏威神從坐而起。偏袒右辺右膝著地。合掌向仏而説言。我於今者欲有所問。願仏聽許為我解釈。爾時仏告舍利弗言。汝舍利弗。恣汝所問。我当解釈令汝心喜……若善男子善女子等。云何欲住於声聞乘辟支仏乘及住大乘。是衆生等有諸業障。云何懺悔云何発露。謂煩惱障諸衆生障法障転後世障。云何懺悔云何発露。……応於昼夜各在三時從坐而起偏見袒右辺右膝著地。合十指掌応作是言……若復未識仏時。未識法時。未識僧時……如是一切所作衆惡。今於一切仏世尊前発露懺悔……如是等業応受惡報。若復現受若当来受……应当如是懺悔業障。如是発露不応覆藏。……⁽⁸⁾

『大乘三聚懺悔經』

『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』は、『舍利弗悔過經』よりも、成立は新しいと考えられている。しかしながら、基本的な思想は同じであり、悪を懺悔しながら、仏道を求めることである。ただし相違点をあげるとすれば、『舍利弗悔過經』が、単に悪を懺悔すると言う消極的な表現に留まっていたのに対して、『菩薩藏經』と『大乘三聚懺悔經』では次のような述語が頻繁に使用されることである。

(1) 惡業・十不善道・身三口四意三業・諸惡業・諸罪業・業障礙・諸惡業障・一切業障 『菩薩藏經』

(2) 業障・身業・口業・意業・惡業・煩惱障諸衆生障法障
障・轉世障・一切法障 『大乘三聚懺悔經』

この二經では、これらの言葉で示されるように、懺悔すべき惡の内容を人間の業の側面から捉えている。

また、このような惡業を懺悔することは『十住毘婆沙論』
「除業品」にも見られる。

我於無始生死已來^二所起罪業。為貪欲瞋恚愚癡^二所逼故。或不識^レ仏不識^レ法不識^レ僧。或不識^レ罪福或身口意多作^二衆罪^一。……或自行^二三十善道^一。……今以^二是罪^一於現在諸仏知者見者証者所^一。尽皆發露不^二敢覆藏^一。從^レ今已後不^二敢復作^一。……如^レ過去現在未來諸菩薩求^二仏道者^一。懺悔惡業罪^一。已懺悔今懺悔當懺悔我亦如^レ是懺悔惡業罪不^二敢覆藏^一後不^二敢復作^一。⁽¹⁰⁾
『十住毘婆沙論』においても、『菩薩藏經』や『大乘三聚懺悔經』に説かれている懺悔の内容を引用しながら、惡業の除去を強調している。

さらに『十住毘婆沙論』は、懺悔と業障について、
於^二諸福中^一。懺悔福德最大。除業障罪^二故。得^レ善行^二菩薩道^一行勸請隨喜廻向^二与^二空無相無願^一和合無^レ異。⁽¹¹⁾

と述べており、人間の罪業を除去することによって、最大の福德が得られると考えている。

惡業を戒める傾向は、初期大乘經典である『般若經』や『十地經』等にも、十善業道や十不善業道として見ることが

『三品經』の懺悔について(藤 近)

できる。

例えば、『道行般若經』では、

……當^二十戒^一。不殺生強盜姪逸兩舌嗜酒惡口妄言綺語。不嫉妬瞋恚罵言不疑……⁽¹²⁾

と云うように、戒めの徳目を十戒、すなわち十善道から説いている。

『大品般若經』では、

菩薩摩訶薩以下^二應^二薩婆若^一心^一。自行^二三十善道^一。亦教^二他行^二三十善道^一。以^二無所得^一故。是名^二菩薩摩訶薩尸羅波羅蜜^一。⁽¹³⁾

と云うように、菩薩は一切智に基づいて、自ら十善道を行じ、他にも十善道を教えることができると説いている。それが、戒波羅蜜として位置づけられている。また、『十住經』では、

我今當自住十善法。亦當為人説諸善法。示正行處。何以故。若人自不行善。為他説法。今住善者。無有是處。⁽¹⁴⁾

と説かれており、自らが十善を守ることによって、はじめ、他に十善を教えることができると云う理由を述べている。つまり、自分自身が善い行為をしてなければ、他に対して悪い行為を戒めることはできないわけである。

このように初期大乘經典では、菩薩行を身口意の三業と関連する十善や十惡の側面から捉えたり、戒波羅蜜の倫理的徳目の実践として示される場合が多い。⁽¹⁵⁾ いずれにしても、菩薩

『三品經』の懺悔について（藤 近）

道を妨げる悪業を戒めるために説かれていると考えられる。

以上、『三品經』の懺悔について、静谷氏の認定した『舍利弗悔過經』や、その異訳である『菩薩藏經』、『大乘三聚懺悔經』を中心にして論じてきた。その特徴は、菩薩道を歩む者が、諸仏に対して、昼夜三回づつ、無始以来から犯してきた多くの悪業を懺悔するものである。一方、『律藏』の波羅堤木叉では、比丘が戒律を破った際に、清浄なる比丘や僧伽の前で懺悔を行うことが述べられている。このように、同じ懺悔ではあっても、『三品經』に説かれる懺悔と部派仏教で行われた懺悔には、内容の上で違いがある。これについて、平川氏は、懺悔を修行法とするのは大乘独自のものであり、部派仏教では懺悔を行法とすることはなかったと指摘されている。¹⁶⁾

いずれにしても、最初期的大乗仏教において、懺悔の行法を実践する主体者は、深い罪業を意識している凡夫の諸菩薩である。そのような菩薩たちは、昼に三回、夜に三回、『三品經』を誦して、自ら懺悔を行い、より強く菩提心を求めている。そして、この懺悔の行法を繰り返すことによって、心は清浄になり、ブッダの説かれた法の真意を次第に理解していくのではないかと考えられる。

1 平川 彰『律藏の研究』（山喜房）四一七頁～四七八頁参照。

2 平川 彰『初期大乘仏教の研究』（春秋社）一三三頁参照。
『初期大乘仏教の研究』Ⅱ（春秋社）一一五頁参照。

3 大正一二・一八下～一九上。

4 静谷正雄『初期大乘仏教の成立過程』（百華苑）一一八頁～一二六頁参照。

5 大正二四・一〇九〇上～中。

6 静谷 前掲書一三一頁参照。

7 大正二四・一〇八六下～一〇八七中。

8 大正二四・一〇九一中～一〇九二下。

9 静谷 前掲書一二二頁～一二六頁参照。

10 大正二六・四五中～下。

11 大正二六・四八中。

12 大正八・四五四中。

13 大正八・二五〇上。

14 大正一〇・五〇四下。

15 平川 彰『初期大乘仏教の研究』（春秋社）四二二頁～四七四頁参照。

16 平川 彰『初期大乘仏教の研究』Ⅱ（春秋社）一一四頁～一一七頁参照。「懺悔とクシヤマ」法華文化研究（第二号）七頁～一〇頁参照。

〈キーワード〉『三品經』、『舍利弗悔過經』、『菩薩藏經』、『大乘三聚懺悔經』、懺悔

（大正大学副手）